

かんのんどう
ていおん
觀音堂の蹄音

高鳥 珠代



受賞のことば
遠い日、馬と過ごした父の背中を胸に、
記憶の風景をたぐり寄せ、言葉にしてみました。
馬頭観音に手を合わせる父の姿——
その祈りに込められた思いを、静かに辿りました。
書くという嘗みの意味を、
あらためて見つめ直す機会となりました。
このたびは、作品をお選びいただき、
心より感謝申し上げます。

プロフィール
横浜生まれ横浜在住。
30歳から5年間、米国シンシナティで暮らす。エッセイや小説を執筆し、各賞での受賞歴がある。奈良大学通信制文学部文化財歴史学科を卒業。代表作: 北の開拓村~父の物語(文芸社)

馬のいる暮らしというのがどういうものなのか、正直なところ、わたしにはよくわからない。わたしが生まれ育ったのは横浜。見渡せば坂とビルと道路ばかり。小学校の通学路の途中に馬がいるような風景は、わたしの記憶の中にはない。

けれど、わたしの父は違った。

父は北海道のオホーツク紋別出身である。そこは寒さの厳しい、雪に埋もれるような土地だ。戦前、開拓民の息子としてその地に生まれ、その地で暮らした。そこで家族は農業を営みながら、馬を育てていたという。

「馬が育てくれたよんだ」

父はよくそんなことを言つた。冗談のようであつて、たゞねると、「供養だよ」とだけ答えた。「誰の?」と聞くと、少し笑つて「馬たちの」と言つた。

父は北海道のオホーツク紋別出身である。そこは寒さの厳しい、雪に埋もれるような土地だ。戦前、開拓民の息子としてその地に生まれ、その地で暮らした。そこで家族は農業を営みながら、馬を育てていたという。

馬が育てくれたよんだ

父はよくそんなことを言つた。冗談のようであつて、たゞねると、「供養だよ」とだけ答えた。「誰の?」と聞くと、少し笑つて「馬たちの」と言つた。

父は北海道のオホーツク紋別出身である。そこは寒さの厳しい、雪に埋もれるような土地だ。戦前、開拓民の息子としてその地に生まれ、その地で暮らした。そこで家族は農業を営みながら、馬を育てていたという。

馬が育てくれたよんだ

父はよくそんなことを言つた。冗談のようであつて、たゞねると、「供養だよ」とだけ答えた。「誰の?」と聞くと、少し笑つて「馬たちの」と言つた。

ジープや戦車、軍用機が、物資や兵士を乗せて、砂煙を上げながら戦場を駆け巡つて、車のシーンをよく目ににする。けれど、同じ時代の日本軍は、アメリカ軍のそれとはまったく違つて、日清・日露戦争から五十年近く経つて、そのころの軍事事情とあまり変わらず、多くの部隊では馬が兵士を乗せ、荷を引き、伝令として前線を駆け回つて、いた。

ジープや戦車、軍用機が、物資や兵士を乗せて、砂煙を上げながら戦場を駆け巡つて、車のシーンをよく目に見る。けれど、同じ時代の日本軍は、アメリカ軍のそれとはまったく違つて、日清・日露戦争から五十年近く経つて、そのころの軍事事情とあまり変わらず、多くの部隊では馬が兵士を乗せ、荷を引き、伝令として前線を駆け回つて、いた。

「とにかく、軍の注文に応えるのが第一だつた。うちの村だけじゃなく、近隣の開拓地でも、みんなが競うように馬を育てていた。誰が一番良い馬を出つか、どこが品評会で評価されるか、それこそ見えない戦いみたいだつたよ。いい馬をたくさん育てていないと、軍は農耕用の馬まで、容赦なく連れていくつてしまつた。

その中でも父の家は、軍馬の品評会で何度も賞を取り、名馬と呼ばれる馬を何頭も送り出していたそうだ。

父はそう言って、しばらく遠くを見るような目をしていた。馬たちがどこへ行き、どんな運命を背負わされたのか。父はあの視線の先に、いつたい何を見ていたのだろうか。

「みんなで、天塩にかけて育てた。いなくなるつてわかつていても、やつぱり情が移る。だから敢えて名前はつけない」

たしか、わたしがまだ小さかつたころのこと。父と一

第二次世界大戦を描いたハリウッドの戦争映画では、

それでも、別れの時はつらい。軍用トラックの荷台に乗せられていく馬の背を見送るたび、心が引き裂かれる。ような思いがしたという。そしてよく口にした。「いまだに、あのときの胸の痛みが忘れない」と。

年齢を重ね、自分の家族を持つようになると、わたしはその言葉の重みが、だんだんとわかるようになつてきた。命を育て、それを国に差し出す。どれほど理屈で割り切っていても、感情までは切り離すことなどできはない。

戦時下、人間だって同じだった。ふつうに暮らしていだ家族から、父を、夫を、兄弟を、そして大切に育てた息子を、戦争が容赦なく奪つていった。

父にとって、馬はまぎれもなく家族だった。そのことを思うと、あのとき父が感じていた痛みは、想像に難くない。

「どこに送られたのか、何に使われたのかもわからない。知らせはなかつた。ただひとつ、出て行つたら二度と帰つてこないつてことだけは、わかつてた」

だからこそ、せめてできるだけのことをしてやりたい。良い仕事ができる馬に育ててやりたい。それが、父たちにできる、精いっぱいだったのだろう。

戦争が終わつたあと、軍馬たちがどうなつたのか、父は多くを語らなかつた。野に放たれたものもいただらうし、戦場で命を落としたものもいたはずだ。運よく生き延びたとしても、鍛え上げられた軍馬に、のんびりとした余生が与えられたとは考えにくい。

「一度戦う体にされた馬は、もうもとの穏やかな馬には戻れないんだよ」

そうつぶやいた父の声は、どこか痛みと諦めがにじんでいた。

けれど戦後になり、生活は変わつた。軍馬として軍部に送られなかつた馬たちは、戦前と同じように、畑を耕し、荷を運ぶことが仕事だという、ふつうの暮らしが戻つてきた。

そして父は、馬たちに名前をつけるようになつた。「だつて家族だからな」と言いながら、耳を撫でてやつたそうだ。「戦争の時、辛くて馬に名前をつけてやれなかつたぶん、こんどはちゃんと名前をつけて、大切に、大切に育てたんだ」と父は語つた。

寒い夜には毛布をかけ、凍らないように戯草を多めに敷き、風邪をひけば何日も付きつ切りで看病したという。

「馬はしやべらないけれど、気持ちは通じるんだ」

父のその言葉には、静かな確信のようなものがあつた。それからは、亡くなつた馬の墓を作り、供養も忘れないかつたという。失つたものへの悔いと、生き残つた馬たちへの感謝。その両方を抱えながら、父は馬と生きていた。

そんなことを話す父の顔には、あの日から引きずつたままの哀しみと、かすかな祈りのようなものが宿つていだ。悔恨、感謝、覚悟、そして慈しみ。複雑な感情が、ひとつの表情の中に、ない交ぜに同居しているようだつた。

わたしは、その顔を覚えている。そして、馬頭観音の前で手を合わせる、静かな後ろ姿も。

わたしは育つた横浜には、「根岸森林公園」という広い公園がある。今は家族連れやジョギングする人が行き交うのどかな場所だけれど、そこはかつて、米軍の競馬場だつたという。そして、そのもつと昔は、日本の近代競馬発祥の地でもあつた。

戦後、父は米軍基地を渡り歩きながら、最後には、不思議なことに、その公園の近くに居を構えた。紋別の寒村から遠く離れたこの丘の上の、なにが父を引きつけたのだろうか。

なぜそこを選んだのか、結局父は語らなかつた。でも、きっと馬の記憶が、どこかで父を導いたのではないかと、いまでは思つている。

馬とともに生きたあの時代の記憶。供養しきれなかつた思い。だからこそ、馬と暮らした匂いのするあの場所が、父には居心地がよかつたのではないだろうか。

馬に触れたことも、飼つたこともないわたしが、こうして馬のことを思い出すのはきっと、父の語つた「思い出」が、どこかでわたしの中に根を下ろしているからだろ。父にとって馬は、暮らしを支えるためだけの、ただの道具ではない。時には心を打ち明ける親友のようないいは血を分けた家族のような存在だつたのだと思う。

大人になつて、久しぶりに根岸森林公園を歩いたとき、沸き立つような草のにおいがした。どこからか、蹄の音が聞こえた気がして、思わず足を止めた。それは父の記憶の残響か、あるいはもう誰も戦に驅り出されることのない世界を願う、馬たちの祈りだつたのか。

今も観音堂の片隅には、あの馬頭観音がひつそりと立つている。時折、誰かが草を払つてくれているのか、手入れが行き届き、供えられた小さな花が、静かに風に揺れていた。

きっといまも、あの子たちは、そこにいるのだろう。わたしの知らない、父の世界。けれど確かに存在している。馬と人の絆の音が、いまも静かに響いている。